

---

# ケルビノの夢【ひとつのメルヘン】

山之口 博道

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ケルビノの夢【ひとつのメルヘン】

### 【Nコード】

N9057K

### 【作者名】

山之口 博道

### 【あらすじ】

ケルビノが見た夢の異世界との交流メルヘン。

## 第1章 山の老人

黄金色の秋が、広い野全体をおおっていた。

ケルビノは、その林のそばの家で、ぼんやりと物思いにふけっていた。

彼は数日前突然死んでしまった、たった一人の妹のことを考えていたのだ。

ずっと以前からある、不治の病が彼女のか細い体にとりついていただけだったから、  
いずれ死がやってくることはわかってはいた。

しかしケルビノは妹が死んでみて、改めて、自分が天涯孤独であることを思い知るのだった。

遠く見渡すと山には白い雲が、ひとつかかり、またすぐ、かなたへ流れていく。

後是一片の、青く澄んだ空だった。

風は少し冷たく、冬のやがて来ることを思わせるものでもあった。

すると、山の老人が、向こうからやってくるのが、見えた。

ケルビノはそんなことにも、気かけず、ただ、青い空を眺めて放心していた。

老人はいつの間にか、すぐ近くに立っていた。

「何を考えているんだね？夏はとっくに過ぎて秋も深まっていると

「いっしょに。」

ケルビノは上の空だった。というより、気持ちが散逸してしまって自分でもまとめることができなかつたのだ。

山の老人は、ケルビノの意識が、すでに遠く、死の国にまで、さまよって行ってしまったのを察すると、そっところ、ケルビノに呟いた。

「山へ行きなされ。山は今頃、秋の実りを迎えているだろうよ。」

もしかしたらお前のその放心は、そこでだけ、安らぎを得られるかもしれないのだからな。」

ケルビノのうつろは心にその老人の声は大鐘のように、鳴り響いていた。

「そうだ、僕は山へ行こう」  
そんな思いがケルビノの心の中にふつつつとわきあがってくるのだった。

つづく。

## 第2章 旅立ち

彼はそうしてふとわれに返った。

午後の日がやさしく陽だまりには、ふりそそぎ、ケルビノの足元には子犬が気持ちよさそうに眠っていたのだった。

老人の姿はそこにはなく、一切は夢かとも思われるのだった。

しかし、「山へ行かなければならない」という、思いはケルビノを駆り立てほとんど強迫観念にまで高まるのであった。

銃を携え、長靴を履き、彼は山行きの服装も整えた。

折から日は赤く、中天から、西のほうにかたむきつつあった。

草地を踏む閉めながら、山の道をたどると、見慣れたはずの風景はいつしかめまぐるしく変わり、

いつしか異様な様相を帯びてくるのだった、

ケルビノの心の中にも、暗雲が立ち込め。気持ちは焦り、足は宙を踏むように、何の感覚もなくなってくるのだった。

山道は次第に、ごつごつとした、岩肌になり、その両側には奇怪な花が咲き乱れているのだった。

ケルビノの意識も次第に朦朧となり、彼はどこを歩いているのかどこへ向かっているのか、まったくわからなかった。

小山を超えたかと思うと、うつそつと茂る中のコケで覆われた小道をたどっていた。

上のほうには聴いたこともない鶏の鳴き声が響き、風が吹くと、つゆが滴り落ちてくるのだった。

やがて、草原に出た。

日はすでに西に傾き、赤く消え尽きるように、山の端にかかっていた。

ケルビノの意識は次第に戻ってきていた。微風が吹くと草原は波のように揺れた、

今まで、一度も見たことがない草原を彼は不思議に思っただけだった。

「このあたりの山で私の知らないところなどないはずなのに」  
そう、独語するのだった。

草地の周りは、暗い森が取り囲み、檻のように囲んでいた。

遠く。高山が森のかなたに垣間見られたが、日はすっかり沈み、暗闇が迫ってきていた、

寒さが増して、鼻は寂しげになき交わし、ケルビノは帰る当てもな  
くうつろたえるばかりだった。

と、目の迷いだろうか？

草地のむこうに明かりが見えたのである。

それは次第にこちらに近づいてきた、

「森の精が私を迷わせようともいつのдарうか？」

その光は何かぞつとするものでもあったから。

しかし、青ざめてたつケルビノの前に現れたのは、死んだはずの妹だった。

「良く来てくれましたね？お兄様。私はきつと来てくれると信じて指折数えて、待っていたのです」

ケルビノは突然の再会にただ、喜び驚くばかりだった。

続く。

### 第3章 再会

妹は、長い病の果てに死んだのに、そのやつれの後も消えて、青ざめてはいたが元気そうだった。

「森の奥では、死者たちが、深夜、宴を張るということを知ったことがあるな」ケルビノは、そう、一人ごちて、妹のあとをついていった。

妹がささげる灯りが、瞬きふと消えた。

するとまるで、時が逆流したかのように、ケルビノの頭をかきむしり激しい頭痛が襲うのだった。

彼はその場にうずくまり、気を失ってしまった。

どのぐらい時がたったのだろうか？

妹の歌う声にふと気がついた。

あたりを見回すと、そこは、古い朽ち果てた、城跡で、紫色の微光の中に、数人の仙女たちが歌を歌っているのだった。

朽ち果てた鐘楼には大きなふくろつが無言でとまっていた。

乙女たちの歌は物悲しく、ケルビノに深い郷愁を呼び覚ますのであった。

それは風にかき消されながらもおおよそはこんな、内容であった。

森林に朝が来ると

小鳥は死んで、

草の褥に横たわる。

やさしい春の日が過ぎ去っても、

小鳥は眠りから覚めない。

夏の暑さも知らず、

秋の実りも知らず、

私の小鳥は死の床に眠る続ける。

冬の雪が白く降り積もるころ

小鳥は雪のひとひらになって

天に帰っていくのだろうか？

そうしてそのころ、

私の心の痛手もようやく、癒えて、

雪がそっと覆ってくれるのだろう。

妹は、ようやく私が目覚めたことを知って

近寄ってきた。

その目は涙にぬれているのだった。

「お兄様、私たちの心もとなさをわかってくれるかしら？」

「ほら、あそこにいるむすめたちも、この別れ路に立って、惑い、

苦しんでいるのよ」

ケルビノは立ち上がろうとしたが、足がふらつきまた倒れてしまった。

森はまばらな樹木がまるで古代ギリシャ神殿の用の林立しているの

であった。

ケルビノは再び深いまどろみが襲ってくるのをどろどろじみじみもなかつた。

つづく。

## 第4章 夢の王国

すると、妹は突然私を揺り起こしこれから、地下の埋宝を探しにい  
きましよう、というのだった。

ケルビノは妹のあとに従った。

死の娘たちは取り囲み見送っていたが、時々異様に光る目が気味悪  
かった。

「ほら、あそこに、青い炎が燃えているわ」  
と、妹は言ったようだった。

しかし今はじめて気がついたのだが妹はまったく唇を開いてはいな  
かったのだ。

そして声だけが、ケルビノの頭に響いていたのだ。

妹の指差すほうを見ると、そこには紫色に光る異様な形をしたきの  
こが生えていた。

「さあ、それを摘みましょう」  
妹がそういうといつの間にか死の娘たちが来て、手に持った小かご  
にそれを摘み取るのだった。

あちらにもこちらにもきのこはたくさんあった。そして摘み取られ  
るたび、きのこは悲鳴を上げるのだった。

ふと妹のかごを見ると、それは灯火の下では、赤黒い血を流すトカ  
ゲの死体だった。

ケルビノはそれを見るとあっと叫んで卒倒してしまった。

おもぐるしい夢の中で、

山の老人が現れてこういうのが聞こえるのだった。

「お前は どうしてそんなうその、幻想のとりこになってしまったんだい。」

たった一人で閉じこもって妹を心配させてはいけないよ」

すると突然妹が現れて

「私を一人にしないで、私を見捨ててつまらない日常生活に戻るうなんて二度と考えないで」

というのだった。

次の瞬間ケルビノは王国の宮廷にあつて戴冠式に臨もうとしているのだった、

紫色の瞳をした女官にかしづかれた妹は燦然と輝く王冠を差し出し

「どうかこれをかぶってこの世界で君臨してください」と  
懇願するのだった。

「この国でならあらゆる芸術も宝石のように花開くのです。あどけないミュージズたちもあなたに仕えることを心待ちしているのです」

妹は切なげな瞳でそういうのだった。

だが突然、怒りの相をあらわに山の老人が現れ、

「醜い妖精たちよ。消え去れ。現世の住人をこれ以上たぶらすのはやめるが良い」と、娘たちを

鞭打つのだった。

するとその宮殿も雲散霧消して、あとに葉、干からびたミイラが朽

ちた棺に横たわっているだけなのであった。

山の老人はゆっくり歩いてきてこういうのだった。

「そうら、

私の言ったとおりだろう。

夢の王国は確かにあるだろう、でもそこでは夢魔に煮た妖精が悪さを仕掛けて若者をたぶらかし、

現世から引き離して、狂わせてしまふんだよ、戻りなさい。近所の人は君を閉じこもって古代の魔術書を読みふける奇人とししか見ていないんだからな」

ケルビノはうなずくと老人は消えていた。

そして次の瞬間はつと目が覚めたのだった。

そこは西日の当たる、自分の家の前だった。

中から人が呼ぶ声がした。

「さあ、夕食の用意ができましたよ」

ケルビノはしっかりした足取りで家のほうに向かって歩いていった。

終わり。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9057k/>

---

ケルビノの夢【ひとつのメルヘン）

2010年10月15日01時39分発行